

4 東日本大震災における消防団の活動状況

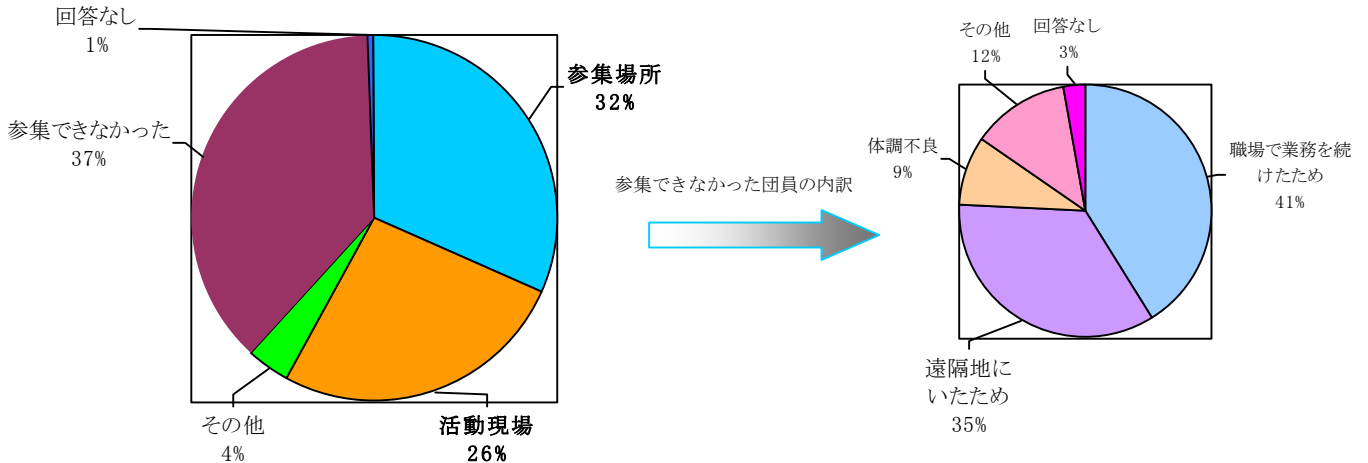
4. 東日本大震災における消防団の活動状況

東日本大震災後に岩手県宮古市、釜石市、宮城県気仙沼市、石巻市及び福島県いわき市の5市のうち沿岸部を担当した分団に消防庁が実施したアンケートに基づいて作成した資料です。

調査対象数は各市町村約100名で合計約500名です。

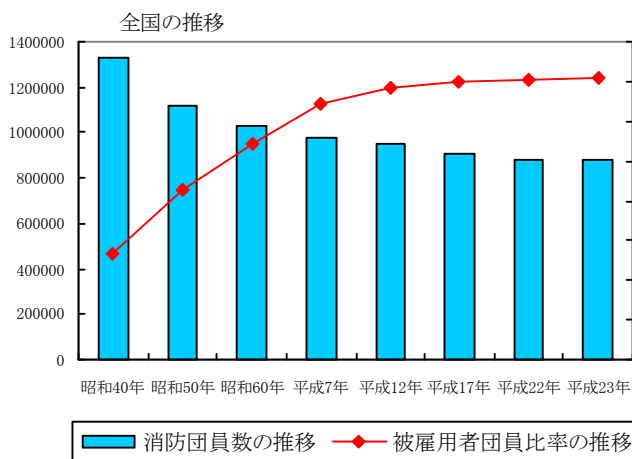
1 発災時の状況(参集・活動)

(1)発災直後どこへ向かいましたか？

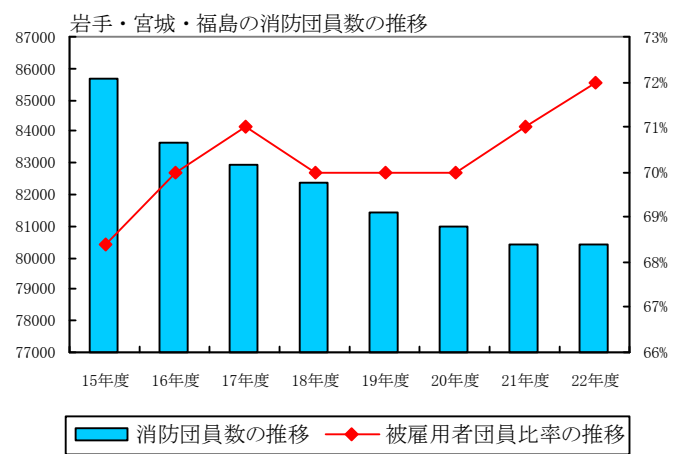


- ・ 全体の6割もの消防団員が地震発生直後に参集場所に集結し、または直接現場で活動に入った。
- ・ 一方、約4割の団員が職場での業務のため等の理由により参集できなかった。

消防団員数と被雇用者団員比率の推移



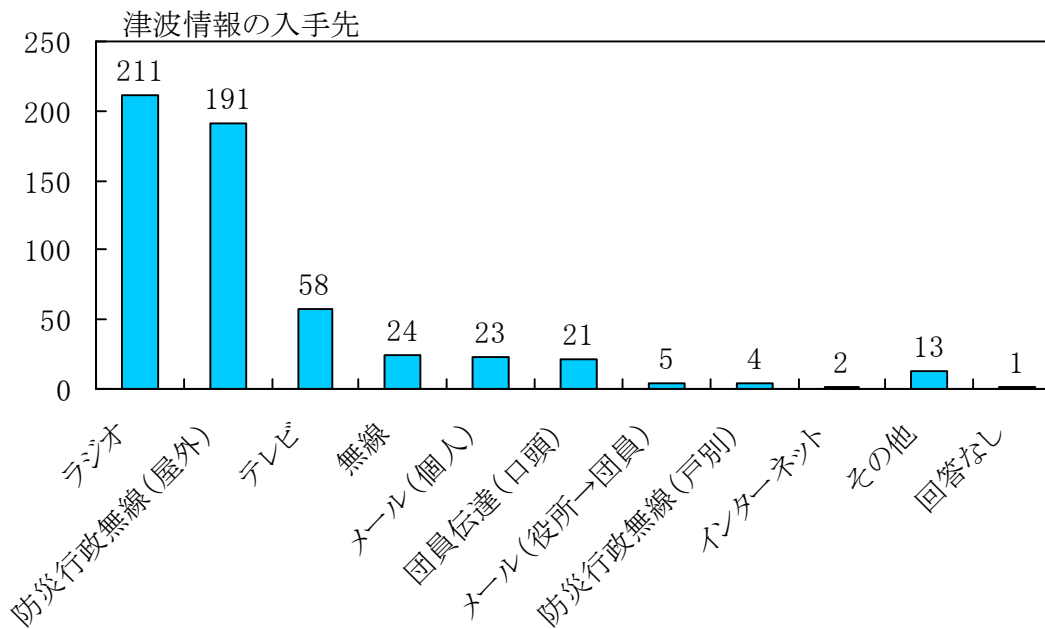
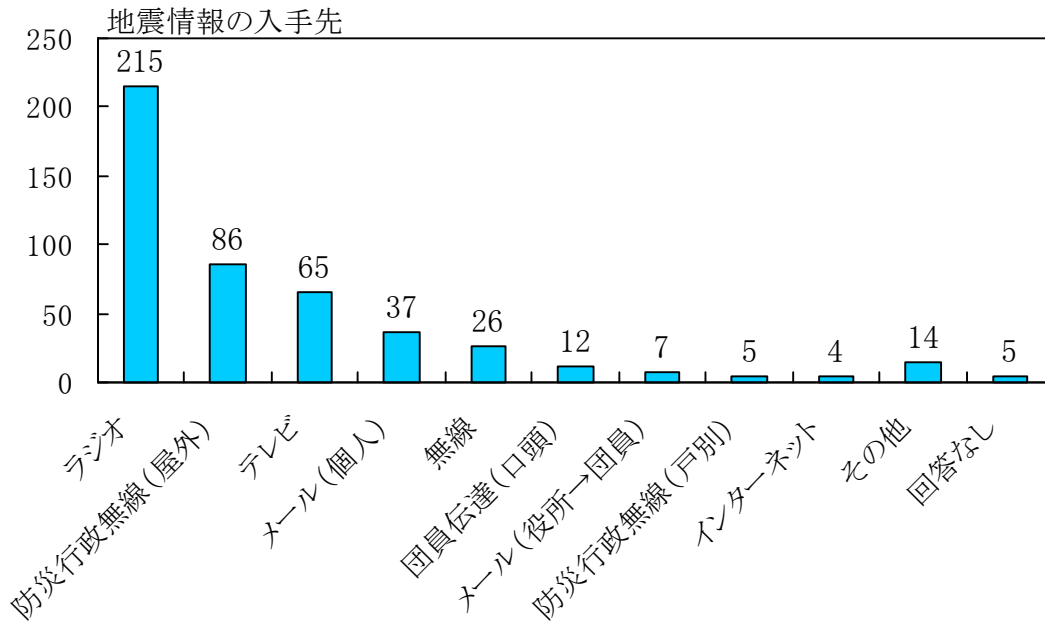
(消防庁 消防防災・震災対策現況調査より)



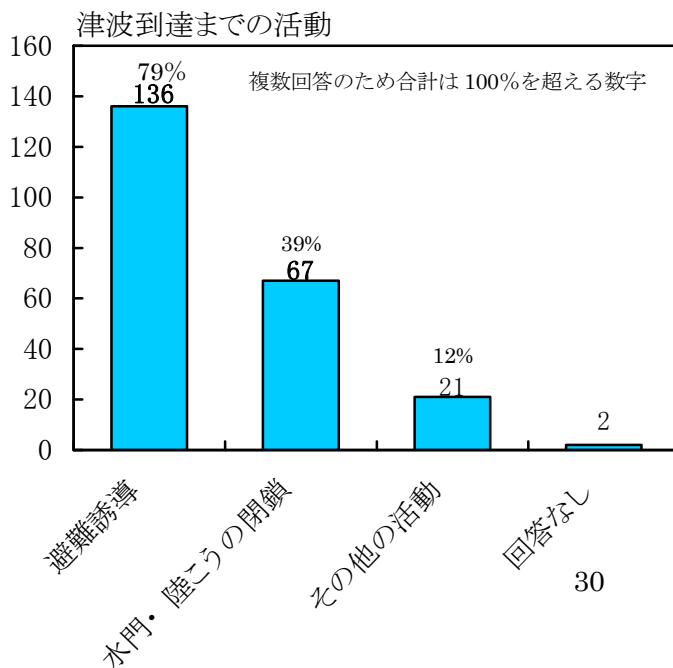
(消防庁 消防年報より)

- ・ これまで消防団員は地域に根ざした取り組みでもあったことあって、自営業者や農林漁業者が多くを占めていたが昭和40年頃から被雇用者の方が増え始め、現在では団員数の7割を被雇用者が占める状況になっている。
- ・ 今回、地区によっては団員の半数以上が被雇用者であるところもあり、昼間の対応は自営業や漁師の団員に依存せざるをえない状況もある。地域に残る団員のみでの緊急活動は体制面や運用面で課題が多い。

(2)地震や津波に関する情報はどこから入手しましたか？



(3)津波到着まで何をしていましたか？



・ 約80%の消防団員が発災直後に避難誘導にあたった。次いで、約40%が水門・陸ごうの閉鎖をしたが続き、その他の活動ではポンプ車の退避や活動指示等があげられている。

2 消防団の被害状況（岩手県、宮城県、福島県）

(1)消防団の被害状況

（平成24年3月13日現在）

| 東日本大震災の被害状況 | | | | | | | | | |
|-------------|-----|-----|-------|-----|---------------------|------------|-----------------|--------|----|
| 人的被害の状況 | | | | | 消防団拠点施設 (詰所等)の状況 | 消防車両等の被害状況 | | | |
| 消防吏員 | 警察官 | 消防団 | | | | 使用不可 箇所 | 使用不能 | | |
| 死者 | 死者 | 死者 | 行方不明者 | 負傷者 | 消防ポンプ自動車 | | 小型動力ポンプ 付積載車 | その他の車両 | |
| 人 | 人 | 人 | 人 | 人 | 台 | 台 | 台 | | |
| 合計 | 23 | 27 | 252 | 2 | 46 | 420 | 48 | 201 | 12 |
| | | | | | | | 261 | | |

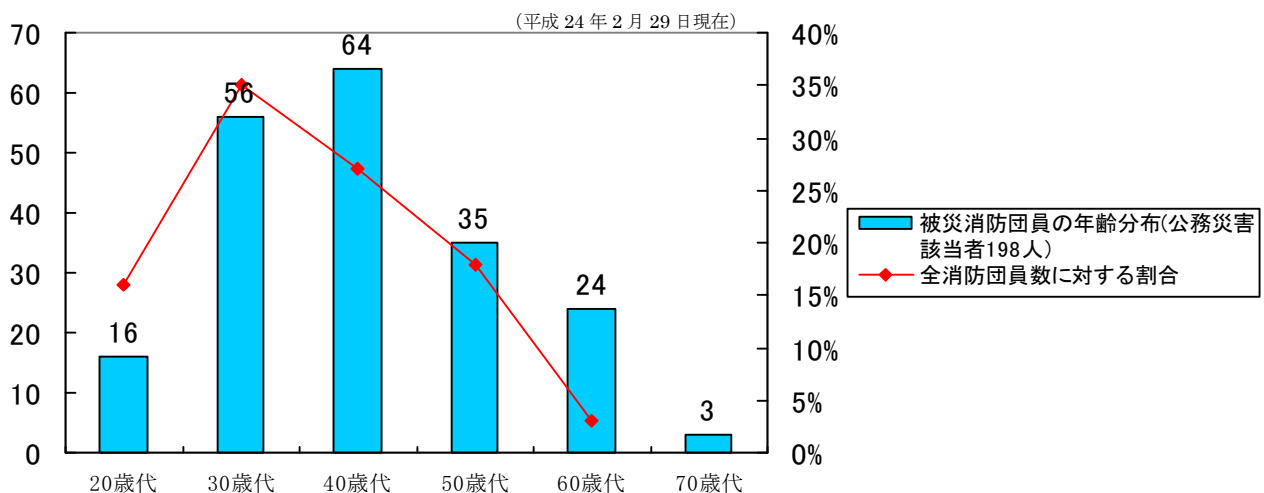
（消防庁 東日本大震災 被害報第145号より）

- ・ 消防団員の死者数は、252名（内公務災害認定者198名）である。

このような多くの犠牲者を出した原因として

- (ア) 想像を超えた津波
- (イ) 津波の最前線で従事
- (ウ) 情報の不足
- (エ) 地域住民の防災意識の不足
があげられる。

(2)被災消防団員の年齢構成

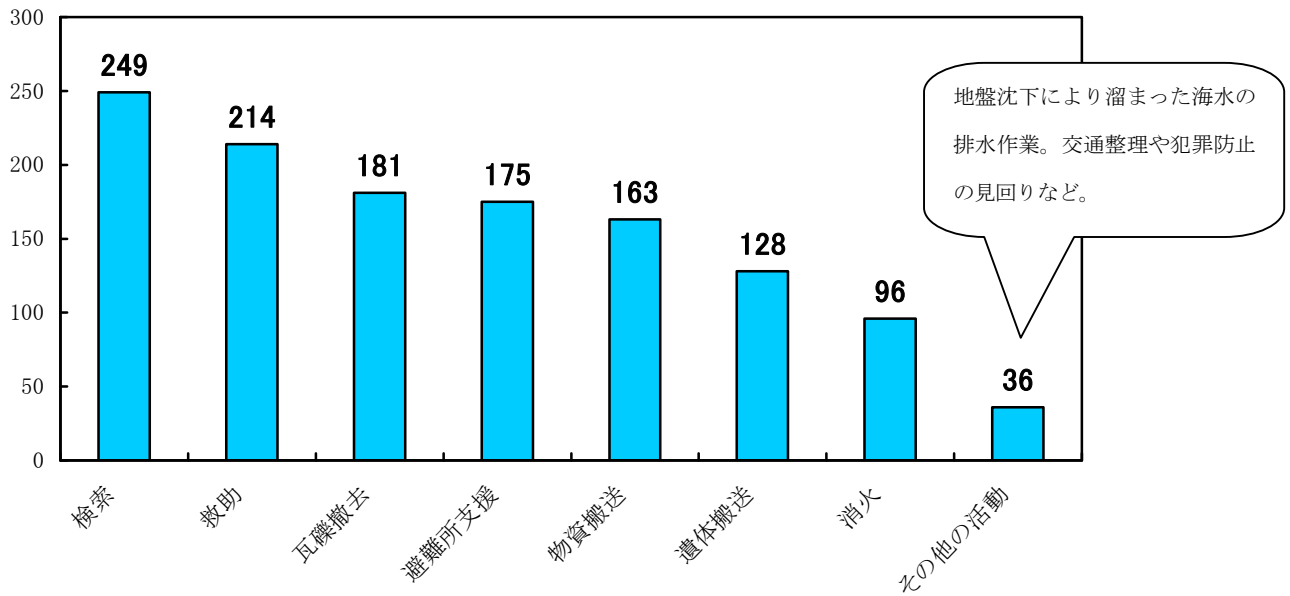


（消防団員等公務災害補償等共済基金 消防団員等の公務災害補償等の現状についてより）

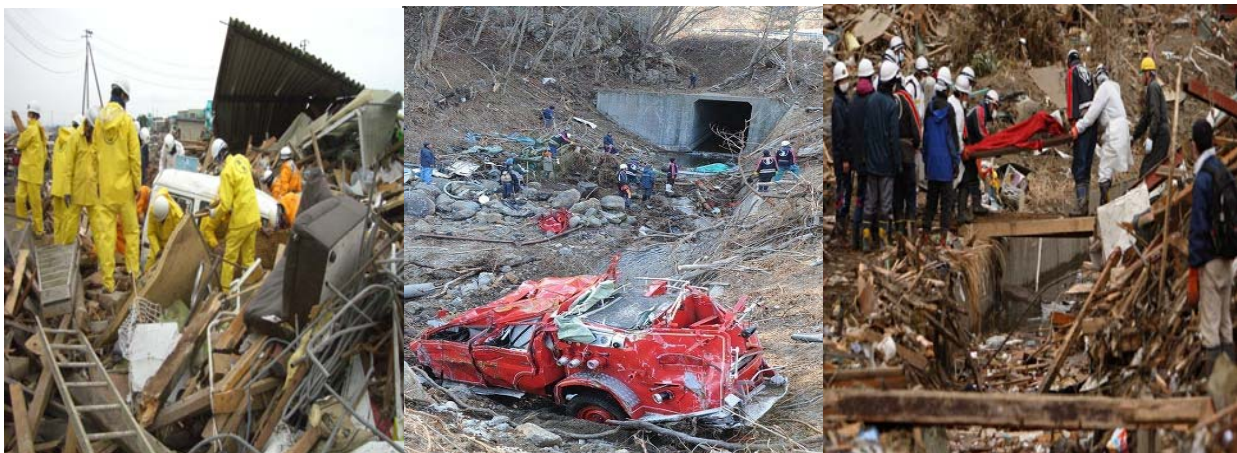
- ・ 犠牲になった消防団員の約6割が働き盛りの30歳代と40歳代である。

3 地震発生1週間の消防団の活動

(1)地震発生後1週間の間にどのような活動をしましたか？



- ・地域の被害状況によって各消防団の活動内容は均一ではないが、あらゆる業務に献身的に取り組んだ。
- ・避難所支援や遺体搬送など本来の消防団業務以外の活動にも従事した。

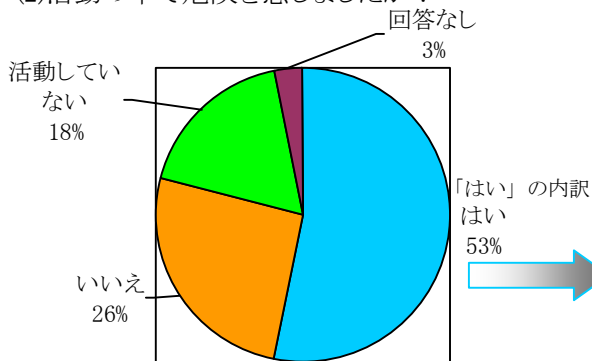


軽装で続けられる連日の活動

大破した消防車両の傍らで活動続ける団員たち

遺体搬送。多くが顔みしりであった。

(2)活動の中で危険を感じましたか？



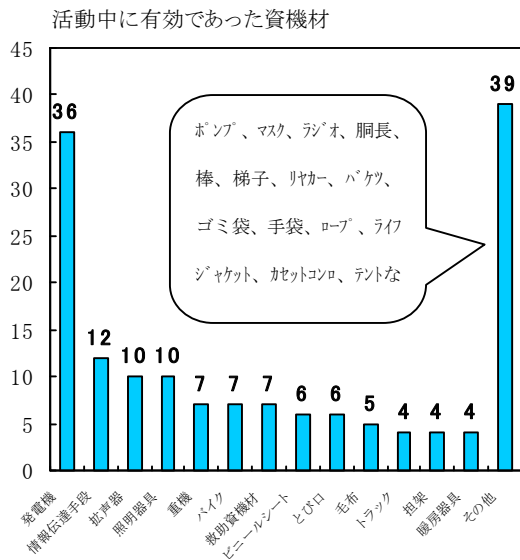
活動の中で危険と感じた例

- ・明かりが全くない中での深夜の活動
- ・屋根の上で捜索の際、雪で足が滑った。
- ・瓦礫等についている釘を踏みつけた。
- ・活動中に津波情報が全く入らなかった。
- ・津波が来ているのに避難指示に従わない人がいた。
- ・津波が見えても海岸に人がいたため海岸まで行き避難させた。
- ・電話不通のため、家族への連絡ができなかった。
- ・複数の高齢者を避難させなければならなかった。

- ・団員の半数以上が活動中危険を感じた。

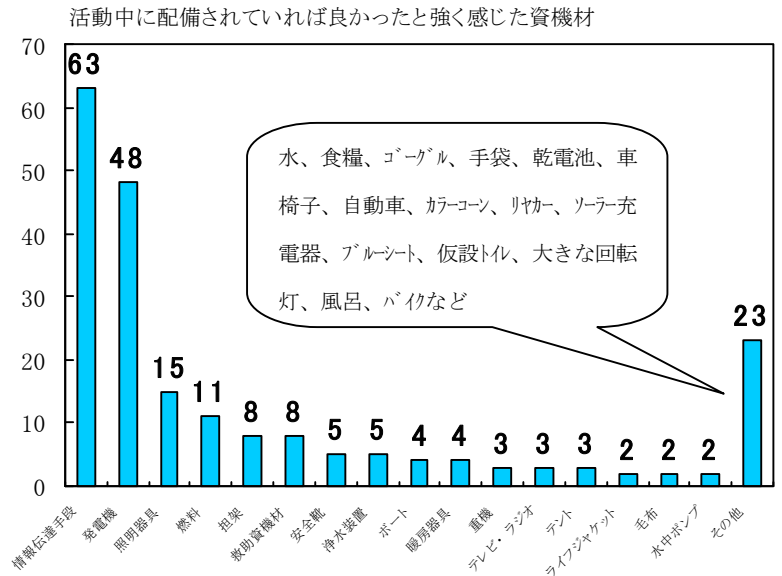
4 装備、資機材

(1)活動中に有効であった資機材は何ですか？



・発電機、情報伝達手段が有効であった。

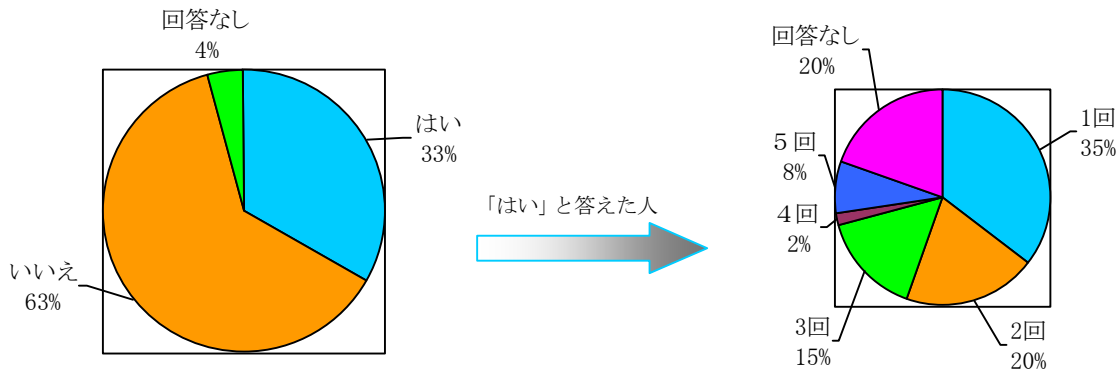
(2)活動中に配備されていれば良かったと強く感じた資機材はありますか？



・情報伝達手段の配備が充分ではなかった。

5 消防団員への教育

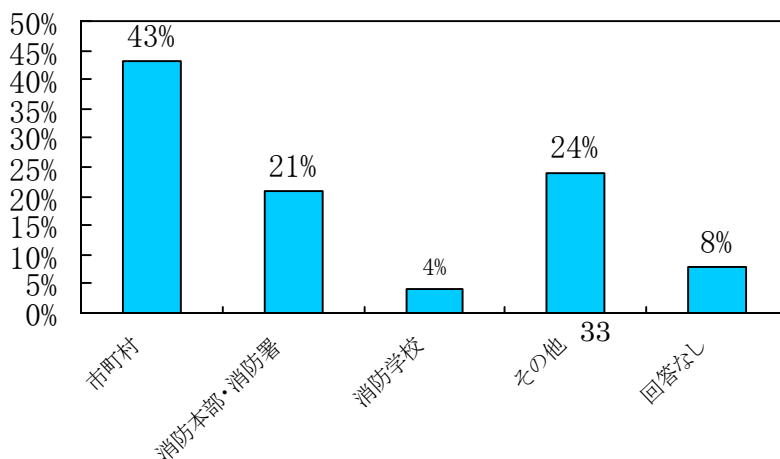
(1)入団後、津波防災に関する教育を受講したことはありますか？



・団員の3割程度しか教育を受けていない。

・津波防災に関する教育の受講回数は2回以内が約5割であった。

(2)教育の実施主体はどこですか？



・市町村や消防本部による教育が6割を占めている。

6 消防団による広域応援活動

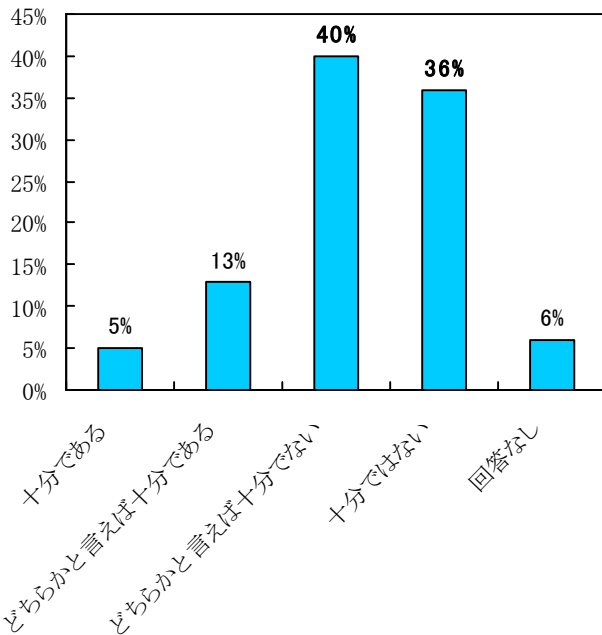
| 市町村名 | 活動場所 | 内 容 | 期間(日) | 人員(人) |
|------|-------|---------------|-------|-------|
| 遠野市 | 釜石市 | 消火活動(林野火災) | 1 | 31 |
| 一関市 | 気仙沼市 | 警戒活動(夜間警戒) | 7 | 63 |
| | 陸前高田市 | 検索活動 | 2 | 117 |
| 平泉町 | 陸前高田市 | がれき撤去活動 | 1 | 27 |
| 住田町 | 大船渡市 | 検索活動 | 4 | 285 |
| | 陸前高田市 | 検索活動 | 5 | 390 |
| 岩泉町 | 宮古市 | 消火活動(建物・林野火災) | 5 | 271 |
| 久慈市 | 野田村 | 検索活動 | 6 | 232 |
| 普代村 | 野田村 | 検索活動 | 5 | 50 |
| 計 | | | 36 | 1466 |

- ・ 岩手県の各市町村からは、相互応援協定に基づき特に被害が大きかった地域に対して、延べ1,400人以上の消防団員が応援出動し、消火活動や救助救出活動等に従事した。
- ・ このほか消防団員がボランティアとして、被災地にて各種支援活動を行っている例もあった。

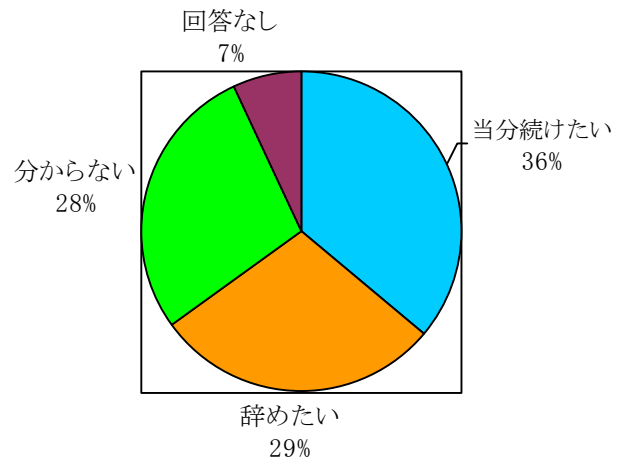
(消防庁 消防白書より)

7 被害後の消防団員の意識

(1) 処遇についてどのように感じていますか？



(2) 今後、消防団員を続けたいですか？



- ・ 「十分ではない」「どちらかと言えば十分でない」と回答した団員が約8割にも達した。

- ・ 約3割の団員が「辞めたい」と回答しており、今後の団運営に不安が残る結果となっている。
- ・ 約4割の団員が消防団員を「当分続けたい」と回答した。

